

第三章 玉鬘の大君の物語 冷泉院に参院

[第一段 大君、冷泉院に参院決定]

かくいふに(こういう長閑な暮らしぶり)、月日はかなく過ぐすも(月日を無駄に過ごすのも)、行く末のうしろめたきを(将来が不安なので)、尚侍の殿はよろづに思す(玉鬘殿は姫君の縁談について色々とお考えになります)。

院よりは、御消息日々(冷泉院からは催促の御手紙が毎日のようにあります)。女御(姫とは敵になりそうな叔母筋の古妃である冷泉院の弘徽殿女御も)、

「うとうとしう思し隔つるにや(遠慮もあまりに過ぎましよう)。上は(院は)、ここに聞こえ疎むるなめりと(私が姫君の参院を邪魔しているのだらうと)、いと憎げに思しのたまへば(それは恨みがましくお考えを仰るので)、戯れにも苦しうなむ(冗談にしても気詰まりです)。同じくは(どうせ参院なさるなら)、このころのほどに思し立ちね(早く決めてください)」

など、いとまめやかに聞こえたまふ(などととても親切に申しなさいます)。「*さるべきにこそはおはすらめ(姫君には冷泉院への参院が良い縁談なのだらう)。いとかうあやにくにのたまふもかたじけなし(古妃の女御が此処まで不本意を圧して仰ってくださるのも恐れ多い)」など思したり(などと玉鬘殿はお考えになりました)。 *「さるべきにこそはおはすらめ」は主語が姫君の<姫はそんなさるべきでいらっしゃるのだらう=是が良縁なのだらう>という玉鬘が冷泉院への縁組判断を下した文、かと思う。が、訳文には<そういう因縁でいらっしゃるらしい>と女御が主語であるとも読めるような言い方になっていて、注には<以下「かたじけなし」まで、玉鬘の心中。同じ妻妾の関係にある女性は嫉妬したり妨害するのだが、好意的に勧誘している。>とある。しかし内心文であっても、貴家にあっては子供に敬語を使うのは変じゃないだらうし、「思し立ちね」と決断を促された玉鬘にとって「さるべき」は<姫の冷泉院参院の妥当性>を意味する、と読むのが自然に思える。それに、「こそ」の判明強調意は「さるべきに」の主体言「さるべき」ではなく格助詞「に」の方に掛かっている、「さるべきにこそは」は<それで相応>という現状理解ではなく、現在の諸事情を踏まえた上で<それが良策だ>と計算結果を出した言い方に違いない。

御調度などは(物入れなどの嫁入り道具は)、そこらし置かせたまへれば(いくつも作り置かせなさせていたので)、人びとの装束(女房たちの衣類や)、何くれのはかなきことをぞいそぎたまふ(何かと婚礼に必要な祝儀品などを玉鬘殿は用意なさいます)。

これを聞くに(姫君の冷泉院参院の話聞いて)、蔵人少将は、死ぬばかり思ひて(源少将は死にそんなほど力落として)、*母北の方をせめたてまつれば(母の三条殿に伯母上の再考依頼を泣きつき申したので)、聞きわづらひたまひて(三条殿は聞き倦ぐねなさて)、 *「母北の方をせめたてまつれば」は注に<雲居雁を。雲居雁は玉鬘と異母姉妹の関係。>とある。「責む」は<無理強いする>みたいな語感で、此処では<せがむ、しつこくねだる、泣き付く>あたりか。少将が姫に執心していることは語られているが、本人同士の文通は語られていないし、取次女房が玉鬘に手引きを厳重に禁止されていたことなどが一章三段にあって、少将の執心の中身がよく分からない。子供の頃に間近で会った記憶でも有るんだらうか。それにしても、此処までの語りでは一方的な思い込みの印象が強く、如何にもマザコンを感じさせる。とはいえ、玉鬘自身も故殿

の言い寄りに無関心で、冷泉帝への宮仕えを内心喜んでいたらしいところに、取次女房の手引きで故殿に犯されて現在に至るという経緯が有るので、女房の動向には過剰なほど用心深く目を光らせた、ということはあるのかも知れない。が、だとしても、故殿は当時でさえ右近衛大将という高官であり、実質で右家筆頭であり、太政大臣の光君、内大臣藤原左家殿に次いで、時の大臣・納言を飛び越した実力者だったと語られており(藤袴巻三章一段)、女房の手引きに重たい現実感があつた気がする。それに引き換え、いくら引退した帝とはいえ、冷泉院と蔵人少将とでは比較に値しないほど身分に差がある。蔵人は帝の威を借りてこそ、その露払いとして時に大臣の前に立つことは有っても、自身の位としては頭の中將にしてやっと参議に加えられる身分であり、朝臣としては大臣・納言・大将の重役となって初めて帝の前に自己主張できるのであり、少将ではまだ人数に入る存在ではない。

「いとかたはらいたきことにつけて(まことに極まり悪い事を)、ほのめかし聞こゆるも(お耳へお入れ申しますのも)、世にかたくなしき闇の惑ひになむ(世に言う愚かな親の鼻眞目でございます)。思し知る方もあらば(お心当たりがあれば)、推し量りて(お察しいただき)、なほ慰めさせたまへ(如何か良しなに)」

など、いとほしげに聞こえたまふを(などと息子を不憫がって申しなさるのを)、「苦しいもあるかな(困ったことですねえ)」と、うち*嘆きたまひて(と玉鬘殿は同情なさって)、*「嘆く」は<悲しむ、困る>で、その懸案内容によって<残念だ、無念だ、悔しい>などと言い表せるかと思うが、此处では少将の恋情に対してではなく三条殿の母心に対して<同情する>と読んで置く。

「いかなることと(良しなにと仰せられても、どうしたものか)、思うたまへ定むべきやうもなきを(判断も付きかねますが)、院よりわりなくのたまはするに(冷泉院からの達ての仰せなので)、思うたまへ乱れてなむ(動揺いたしております)。まめやかなる御心ならば(本心での御考えなら)、このほどを思ししづめて(今回は見送りなさって)、慰めきこえむさまをも見たまひてなむ(善処を講じますのをお待ち頂くのが)、世の聞こえもなだらかならむ(世間体も宜しいでしょう)」

など申したまふも(などと三条殿へお返事なさるのも)、この御参り過ぐして(この姉姫の参院を終えた後で)、中の君をと思すなるべし(源少将には妹姫との縁組をお考えになつてのこのことのように)。

「*さし合はせては(そうした帳尻合わせは)、うたて*したり顔ならむ(当面の解決案に過ぎない)。まだ(まだ少将は)、位などもあさへたるほどを(身分なども低いし)」など思すに(などと玉鬘殿はお考えで)、*「差し合はず」は<物事が重なる>とあるが、ここでの語用は<婚儀が重なる>という意味ではなく、「然仕合はず」で会計上の<帳尻が合う>という意味にも見える。即ち、姉姫との不縁を妹姫との縁組で挽回する、みたい。*「したり顔」は<得意顔>である事が多いのだろうが、妹姫との結婚が少将にとって納得出来る(=したり)事かどうかは分からないので、是は玉鬘自身の納得(=したり)を示しているかと思うが、本人同士の意向確認も無い内にこの縁組を自慢げに胸を張れることとも言い切れぬように思えて<得意顔>には違和感がある。言ってみれば、この面倒な事態の收拾について、玉鬘が自分ひとりの頭の中で辻褄を合わせた一つの解決案、のよう見えて、その意味では<自分に都合が良い=したり=ご都合主義>みたいな言い方だろうか。

男は(少将は男心に)、さらにしか思ひ移るべくもあらず(全くそのようには考えを変える事が出来ず)、ほのかに見たてまつりてのちは(囲碁を打っていた姉姫を仄かに押し申してからは)、

面影に恋しう(面影が忘れられずに恋しくて)、いかならむ折にとのみおぼゆるに(またいつか会える日をとばかり思っていたのに)、かう頼みかからずなりぬるを(このように望みを絶たれては)、思ひ*嘆きたまふこと限りなし(思い嘆きなさることこの上ない)。 *「嘆きたまふ」と敬語遣いになっている。却って突き放した言い方に聞こえるのは、悪御達を意識しすぎか。

[第二段 蔵人少将、藤侍従を訪問]

かひなきことも言はむとて(源少将は愚痴の一つも言ってみたくて)、例の(いつものように)、侍従の曹司に来たれば(玉鬘邸の藤侍従の部屋に来てみると)、源侍従の文をぞ見ゐたまへりける(藤侍従は源侍従の手紙を読んでいらっしやるのでした)。 *「かひなきこと」は<効果が期待出来ない話=役に立たない話=無駄話>で、「無駄話」というと<愚にも付かない暇潰しの世間話=世情全般についての認識共有>みたいな語感だが、源少将が藤侍従に訴えるのは姫への恋情であり、それが姫に伝わることや、増して良い返事が貰える事など全く期待出来ない、という意味だから<無駄話>というよりは<恨み言>になりそうだが、それでも<恨み言>と言わずに「甲斐無き言」と言うのは、無駄になっても良いから姫の参院を恨み事として認めたくない、諦め切れないその気持だけでも伝えて置きたい未練のように思われ、そういう私的感情や思い入れが強い事柄を客観視して思考整理を試行するのは、一般的な無駄話ではなく<愚痴>と言う。

ひき隠すを(藤侍従が伏せて隠すのを)、さなめりと見て(その紙や形状から、源侍従からの手紙だろうと源少将は踏んで)、奪ひ取りつ(奪い取りました)。「*ことあり顔にや(変に勘繰られたくない)」と思ひて(とあって藤侍従は)、いたうも隠さず(強く隠し立てはしません)。 *「ことあり顔にや」は微妙な表現だ。源少将と源侍従と藤侍従は友達同士らしい。親戚関係の幼馴染同士で年齢も近そうだ。藤侍従が少し年少だろうか。しかし、この家の姫君を廻っては、源少将と源侍従は藤侍従に恋情を打ち明けて取次や便宜供与の協力を得たい者同士だ。その事情も隠しようもない。が、それでも、藤侍従に託す恋敵同士の依頼は、個別の信頼関係に基づく。私信は他者に秘匿すべきであり、他者もそれを尊重してこそ自らの信頼も保てる。が、それでも止むに止まれぬ感情でその禁を犯す。そして、それも分かり合える三者の関係、という微妙な距離感が表現されているのだろう。しかし、源侍従は18歳だろうと見当を付けるが、源少将と藤侍従の年齢は未だ分からない。こういう微妙な関係を描きながら、そうした基本情報の欠落に幾分説得力が損なわれる、というか、読み間違えをいつまでも危惧する過度な負担感が消えない。

そこはかたなく(源侍従の手紙は姫の参院決定を殊更に取り上げて激情を吐露するようなものではなく)、ただ*世を恨めしげにかすめたり(ただ儘ならぬ恋情を残念そうに少し示してありました)。 *「世」は注に<男女関係>とある。そういう意味だろうと納得するが、「男女関係」と言ってしまうと<肉体関係>や少なくとも<本人同士の愛人認識>を意味しそうで、其処まで本人同士が親しくなっていたとも思えず、此处で言う「男女関係」は<男女間の恋情>であり、それも姫に対しての源侍従の一方的な思いなのだろうが、源侍従はそれを一般的な失恋に見立てて客観視している、という意味での「世」なのだろう。源侍従は持てるし、結婚願望が無いので、諦めは早いのだろう。

「つれなくて過ぐる月日をかぞへつつ、もの恨めしき暮の春かな」(和歌 44-13)

「姫の祝いを思うほど、暗い気分の遅い春」(意識 44-13)

*「つれなくて過ぐる」は<他の男のところへ去って行く>。「月日を数ふ」は<婚礼の日が近付く>。「くれのはる」は<暗い気持ちになる晩春>。それにしても、主題であろう残念な気持ちをくもの恨めしき>と言って片付けてしまふ、源侍従の耐え難いほどの分かり易さは、この人の歌詠みの特性として今後も続くのだろうか。

「人はかうこそ(源侍従はこのように)、のどやかにさまよくねたげなめれ(穏やかに体裁よく残念がっているようなので)、わがいと人笑はれなる*心焦られを(自分の傍目に見苦しいほど苛立っている姿を)、かたへは*目馴れて(見比べて普通の人に思われて)、あなづりそめられにたる(軽んじられてしまったのだ)」など思ふも(などと思うのも)、胸痛ければ(辛いので)、ことにも言はれで(何も言えずに)、例、語らふ(いつも取次を頼む)中将の御許の曹司の方に行くも(姫君の女房の中将のおもとの部屋に向かうものの)、例の、かひあらかしと(是も無駄なことだろうと)、嘆きがちなり(嘆きがちなのでした)。 *「心焦られ(こころいられ)」は古語辞典に「心苛られ」とも表記され<心が苛立つこと、落ち着かない気持>とある。「心苛られ」は「心苛らる(苛立つ、焦る)」の連用名詞で<苛立ち>という抽象概念を示しているようにも見えるが、此処では「わが」と自分の感情を客体視している姿勢が示されているので、その<姿>を文意するかと思う。 *「目馴る」は<見慣れる→普通に思う>。

侍従の君は(藤侍従は)、「この返りことせむ(源侍従に返事をせねばならない)」とて、上に参りたまふを見るに(とすることで、玉鬘殿に相談しようとするのを見ると)、いと腹立たしうやすからず(源少将はとて腹立たしく落ち着かず)、*若き心地には(恋に未熟なので)、ひとへにものぞおぼえける(一途に思い込むのです)。 *「若き心地」は<経験不足>。源少将は年齢自体も源侍従よりも小さくて藤侍従と同じか近いくらいだったのかも知れない。しかし未だに明示が無い。

あさましきまで恨み嘆けば(源少将が取り成しようもなく酷く嘆き悲しむので)、この*前申しも(この取次役の女房も)、あまり戯れにくく(あまり軽々しく受け流しも出来ず)、いとほしと思ひて(同情して)、いらへもをさをさせず(相槌さえうかつに出来ません)。 *「前申し(まへまうし)」は注に<一語。取り次ぎ役、中将の御許のこと。>とある。

かの御碁の見証せし夕暮のことも言ひ出でて(源少将はあの囲碁勝負の場面を見物した夕暮れの日のことと言ひ出して)、「さばかりの夢をだに(あれくらいの夢で良いから)、また見てしがな(また見たいものだ)。あはれ(ああもう私は)、何を頼みにて生きたらむ(何を励みに生きて行けば良いのか)。かう聞こゆることも(このように話すことも)、残り少なうおぼゆれば(もう無い気がする)、*つらきもあはれ(辛さも恋の内)、といふことこそ(と古歌に言っている事は)、まことなりけれ(本当なんだ)」と、いとまめだちて言ふ(と実に真顔で言います)。 *「つらきもあはれ」は<「嬉しくは忘るることもありなまし辛きぞ長き形見なりける」(古今六帖四-二一九一 清原深養父)>と参照指摘がある。

「あはれと、言ひやるべき方なきことなり(可哀相で掛ける言葉も無いほどだ)。かの慰めたまふらむ御さま(あの上から三条殿へのお慰めのことも)、つゆばかりうれしと思ふべきけしきもなければ(少しも嬉しそうな様子も無いので)、げに(なるほど)、かの夕暮の頭証なりけむに(あの夕暮れの見物で姫君をはっきり見た事が)、いとどかうあやになる心は添ひたるならむ(ますます未練を募らせることになったようだ)」と、ことわりに思ひて(と源少将がいつまでも嘆く気持ちが分かる気もして)、

「聞こしめさせたらば(でも、未練が募るからといって、あの時に姫君が少将の立会いをお知りになったら)、いとどいかにけしからぬ御心なりけりと(ますます何と無作法な少将の振舞いだろうか)、疎みきこえたまはむ(姫はあなたから気持が離れなされたことでしょう)。心苦しと思ひきこえつる心も失せぬ(ご同情申す気持ちもなくなりました)。いとうしろめたき御心なりけり(あの時に姫君を遠目で見ただけなのが心残りとは、本当に畏れ多いお考えです)」

と(と中将の御許は)、*向ひ火つくれば(わざと源少将に難癖を付けて見せると)、 *「向かひ火」はく燃え進んでくる火の勢いを弱めるために、こちら側からも火をつけること。また、その火。>と大辞泉にある。山火事での向かい火は制御できる範囲で予め草を焼いて可燃物を無くして延焼を防ぐという一種の破壊消火方法でもあるらしいが、火事は酸化反応なので大量の酸素を消費し周囲の空気を引き込むと共に、熱せられた空気は上昇気流となって一つの燃焼作用は勢いを増すばかりとなるので、その燃焼がまだ小さい初期の内は、それに対抗しうる燃焼作用を別に計画的に起こして、先の燃焼作用の勢いを弱めた上で全体を一気に消火する、という手法も成り立つのだろう。多分、この「向かひ火」はその後者の意味で<相手の機先を制する挑発>という意味の語用なのだろう。制御できる範囲で火事を起こす、とは、わざと難癖を付ける、か。

「いでや、*さはれや(いや、もう私は野蛮な男と思われても構わない)。 *「さはれ」はく「さはあれ」の約。>と古語辞典にある。「さはあれ」は「然は在れど構はじ(そうであっても構わない)」の約、だろうか。古語辞典では大体そんな風な説明になっている。「然は」は何を指すのか。中将の御許が非難したのは、少将が強引に手引きを迫るといふ貴族にあるまじき無軌道さ、なのだろう。実際には、源少将はあの囲碁の日は大人しく引き下がったのだが、今となってはあの時に姫を犯してしまいたかった、と思っているのも事実らしい。だから、中将の御許の非難は的を射ている。そして見事に火消しを成し遂げた。場数を踏んだ女房、の感。

今は限りの身なれば(もう先の無い身なので)、もの恐ろしくもあらずなりにたり(怖いものは何もない)。さても負けたまひしこそ(それにしても姫君が負けなされたのが)、いといとほしかりしか(残念でならない)。おいらかに召し入れてやは(あの時に姫君が私を平然とお側にお呼び寄せ入れ下さっていたなら)。目くはせたてまつらましかば(目配せで良い手をお知らせ申しましたので)、*こよなからましものを(絶対有利だったのに)」など言ひて(などと言って一句)、 *「こよなからむ」は「こよなし(絶対有利だ)」の未然形に仮定叙述の助動詞「む」が付いたもので<絶対有利だった>。

「いでやなぞ数ならぬ身にかなはぬは、人に負けじの心なりけり」(和歌 44-14)

「人数ならず持て余す、人一倍の負けん気よ」(意識 44-14)

*注に<蔵人少将の詠歌。『集成』は「「数」「負く」は、会話から続いて、碁の縁語」と注す。>とある。自分で自分を蔑んでみせる、というのは、自己を客観視出来た標しだ。やっと吹っ切れたらしい。

中将、うち笑ひて(中将の御許は笑い出して)、

「わりなしや強きによらむ勝ち負けを、心一つにいかがまかする」(和歌 44-15)

「勝った者こそ強い者、負けん気だけでは勝てません」(意識 44-15)

*注にく中將の御許の返歌。「強き」「勝ち負け」は碁の縁語。「強き」は冷泉院を暗示。>とある。芝居は仕上げが肝心だ。嫌味を言い続けて身の程を思い知らせる。生半可で宥めると恨みがぶり返して、いつまでも抜けなくなる。却って逆効果だから、本人が自分の足許を見直せるまで徹底的に世間を演じなければならない、みたいな。

といらふるさへぞ(と応える返歌さえ)、つらかりける(突き放したものでした)。

「あはれとて手を許せかし、生き死にを君にまかすわが身とならば」(和歌 44-16)

「一手お譲り頂いて、起死回生と致したい」(意識 44-16)

*注にく蔵人少將の詠歌。『集成』は「手をゆるす」は、碁で相手に何目か置き石を許すこと。「生き死に」は碁の縁語」と注す。>とある。「手を緩す」はく詰めを待つ→姫の参院決定を中止する>みたいなことらしい。本当に「かひなきこと」だ。

泣きみ笑ひみ(後は冗談で笑い飛ばすしか無く)、*語らひ明かす(少將は中將の御許に一晩中慰められました)。*「語らふ」はく話し合う、相談する>でもあるが、「明かす」というのはく一夜を共にする>のだから当然にく情交する>のだろう。ただ、こういう場合のく情交>の風情は肉欲よりは慰めなのだろう。

[第三段 四月一日、蔵人少將、玉鬘へ和歌を贈る]

またの日は(その翌日は)、卯月になりければ(四月一日だったので)、兄弟の君たちの(源少將の兄弟の右大臣家の子息たちは)、内裏に参りさまよふに(参内のために動き回って用意していたが)、いたう屈じ入りて眺めぬたまへれば(少將はひどく落ち込んで部屋に籠もっていらっしやっただので)、母北の方は(母の三条殿は)、涙ぐみておはず(涙ぐんでいらっしやいます)。

大臣も(源殿も)、「*院の聞こしめすところもあるべし(失恋で夏入り参内に仕え申し上げないとすると、冷泉院も少將の藤姫への執心をお聞き知りなさることになるだろう)。*「院の聞こしめすところ」は注にく以下「え違へたまはざらまし」まで、夕霧の詞。冷泉院が蔵人少將の執心ぶりを聞いたら不快に思うだろう、の意。>とある。発言文は場に即して語られる。当時の宮廷読者のような現在生活感の無い私のような読者は、この場の状況を補語しないと意味がつかめないが、どう補語すべきかはいつも悩ましい。

何にかは、*おほなおほな聞き入れむ、と思ひて(どうして此方の事情を全て分かってくれようかと思って)、くやしう(悔やまれることに)、*対面のついでにも(年始で姉上にお会いした折にも)、うち出で聞こえずなりにし(少將との縁談は言い出さずじまいだった)。*「おほなおほな」はくおのおの、各々>と古語辞典にあり、此处ではくいちいちの事情→全て>という意味かと思ったが、大辞泉には大様に近いのかく事の簡単に行われるさま。無造作に。あっさり。>という語用もあるように説明されていて、語感がつかめ無い。それでも、文意の論理性から見て「おほなおほな聞き入れむ」はく全て了解する>と取って置く。*「対面のついで」は注にく玉鬘との面会の折。>とある。二章一段に「右の大臣も御子ども六人ながらひき連れておはしたり」とあった。

みづからあながちに申さましかば(私から直接是非にと願い申せば)、さりともしえ違へたまはざらまし(いくらなんでもお断りなさらなかったらう)」などのたまふ(などと仰います)。

さて(そういうわけで)、例の(今日もまた)、

「花を見て春は暮らしつ、今日よりやしげき嘆きの下に惑はむ」(和歌 44-17)

「花見の春が過ぎた今、木陰に泣いて惑う夏」(意識 44-17)

*注に<蔵人少将の独詠歌。「嘆き」に「木」を響かせ、「繁き」と縁語。>とある。が、下に「聞こえたまへり」と恋文が遣されたのだから、是は贈歌に違いない。

と聞こえたまへり(と少将は姫君に贈歌なさいます)。

御前にて(姫君の御部屋で)、これかれ上臆だつ人びと(主だった上級女房たちが)、この御懸想人の(今回の失恋諸君たちの)、さまざまにいとほしげなるを聞こえ知らせるなかに(それぞれに取次ぎ申し上げた方々の残念そうな様子を話し聞かし合う中に)、中将の御許(中将の御許が源少将の様子を)、

「生き死にをと言ひしさまの(「生き死にを君にまかすわが身とならば」と歌にして)、言にのみはあらず(本当にそのように)、心苦しげなりし(苦しそうでした)」

など聞こゆれば(などと話す)、尚侍の君も、*いとほしと聞きたまふ(玉鬘殿もとても気懸かりにお聞きなさいます)。*「いとほし」は<可哀相だ、気の毒だ、不憫だ>や<可愛い>という語用が多いが基本的には<とても気懸かりなこと>という言い方で、場面で中身が変わる。此处では、その場面が下に示されているかと思うが、正に色々な事情が気になった、ということのようで、そのまま<気懸かり>と言う他は無さそうに見える。

「*大臣、北の方の思すところにより(父源殿や母三条殿の親心に対し)、せめて人の御恨み深くはと(どうしても少将の御嘆きが深いならと)、*取り替へありて思すこの御参りを(代わりに妹姫を娶らせるということまでお考えになった上の姫君の冷泉院参院決定を)、*さまたげやうに思ふらむはしも(少将が不服そうに思っているような節も)、めざましきこと(とても心外だし)、*「大臣、北の方の」は注に<以下「はえばえしからぬを」まで、玉鬘の心中。末尾は地の文に流れる。>とある。が、とても分かり難い文だ。脱稿・逸文も疑わしい。ただ、下の「御返事」が中将の御許の代返らしいので、とは言え少将の手紙は中将の御許に託されていて、姫に如何伝えるのかも女房次第であり、まして主人の許しが無い男への返事を姫が書く筈も無く、女房の代返がいつものことなのだろうが、文意や敬語遣いからの整合性から見て、此处から「行く末のはえばえしからぬを思したる」までを、中将の御許が玉鬘殿の心中を忖度した内心文と見做す、という校訂を思い付いた。それでも分かり難いが、「思したる、折しも」を語りの中で読めば、そういう解釈も有り得るような気がして来た。どうせ分からないのだから、一先ず此处はそういう解釈で自分なりに分かり易いように読んでみようかと思う。「取り替へありて思すこの御参りを」は注に<大君に代えて中君を蔵人少将にと考えている、この大君の冷泉院入内を、の意。「思す」という敬語の前後は地の文。>とある。*「さまたぐ」は<邪魔する>でもあるが<支障になる>とも古語辞典にある。注には<主語は夕霧や雲居雁。敬語抜き表現。推量助動詞「らむ」視界外推量、はるかに想像しているニュアンス。>とある。

限りなきにても(如何に高家でも)、ただ人には(臣下身分の者には)、かけてあるまじきものに(姫を決して嫁がせないと)、故殿の思しおきてたりしものを(故殿が御遺言なさいっていたものを)、院に参りたまはむだに(姫君が今上帝や春宮ではなく、冷泉院に参院なさるのでさえ)、行く末のはえはえしからぬを思したる(引退なさいった帝では将来性が乏しいということを上は考えていらっしやる)」

折しも(と中将の御許が主人の心中を推し量っていた、ちょうどその時に)、この*御文取り入れてあはれがる(この少将の御手紙が届いて、女房たちはそれを話題に盛り上がります)。*「御文取り入れてあはれがる」は注に<主語は女房たち。>とある。「取り入る」は<場に取り込む→話題にする>。「あはれがる」は<しんみりする>んじゃないなくて<彼は言って盛り上がる>んじゃないかな。悪御達の語りなんだから。

御返事(中将の御許が御返歌を代返して)、

「今日ぞ知る空を眺むるけしきにて、花に心を移しけりとも」(和歌 44-18)

「やっとなあなたのお手紙が、ただの花見と知りました」(意識 44-18)

*注に<『集成』は「中将のおもとがしたのだろう」。『完訳』は「女房の代作である」と注す。>とある。昨夜ねんごろに論したはずなのに、少将は相変わらず<素直な恋情>を訴えて来る。中将の御許もいい加減嫌気を覚えたのだろう。

「あな(あらま)、*いとほし(ひどい)。戯れにのみも取りなすかな(冗談で済ますんですか)」*「いとほし」は語意以上の説得力がある感じ。フリが「卯月になりになれば」で、ボケが「今日よりや」で、ツッコミが「今日ぞ知る」で、オチがこの「いとほし」、みたいな。

など言へど(などと他の女房が言うが)、うるさがりて書き変へず(中将の御許は源少将の取り成しを面倒がってその返歌を書き換えません)。

[第四段 四月九日、大君、冷泉院に参院]

九日にぞ(ここぬかにぞ、四月九日の日に)、参りたまふ(玉鬘殿の姉姫は冷泉院に参院なさいます)。「九日にぞ」は注に<『河海抄』は、藤原時平の娘が宇多上皇に四月九日に入内した例を引く。>とある。宮廷内で語り草の華麗な婚儀だったのか、何か事件になった縁談だったのか、その意味するところは知らないが、「九日」と言うことで、何かの印象を読者に喚起する意図はあったのだろう。

右の大殿(源右大臣殿は)、御車(みくるま、参列用の牛車や)、御前(ごぜん、騎馬従者)の人びとあまたたてまつりたまへり(の従事者を多数差し向けなさいました)。北の方も(三条殿も)、恨めしと思ひきこえたまへど(息子との縁談を断られたことは恨めしく思い申しなさいましたが)、年ごろさもあらざりしに(近年に無く)、この御ことゆゑ(この縁談の件で)、しげう聞こえ通ひたまへるを(頻繁に手紙を遣り取りなさいったのを)、またかき絶えむもうたてあれば(また何の標しも無しに途絶えてしまうのも惜しまれたので)、被け物ども(振る舞い用の祝儀品類や)、よき女の装束ども(上質の女物衣類などを)、あまたたてまつれたまへり(多数お贈り申しなさいました)。

「あやしう(変な風に)、うつし心もなきやうなる人のありさまを(気の抜けたようになってしまった息子の看病を)、見たまへ扱ふほどに(致しております内に)、承りとどむることもなかりけるを(この度の御婚礼日取りをお知らせ頂いておりませんで)、おどろかさせたまはぬも(急なお知らせに)、うとうとしくなむ(他人行儀など恨んでおります)」

とぞありける(と三条殿の添え状にありました)。おいらかなるやうにてほのめかしたまへるを(穏やかな口調で恨み言を仄めかしていらっしゃるのを)、いとほしと見たまふ(玉鬘殿は厄介な事とお思いになります)。

大臣も御文あり(源殿からもお手紙があります)。

「みづからも参るべきに(私自身も参列いたすべき所と)、思うたまへつるに(存じながら)、慎む事のはべりてなむ(謹慎日にて失礼致します)。男ども(息子たちを)、雑役にとて参らす(雑用にと参らせます)。疎からず召し使はせたまへ(遠慮なく御用をお申し付け下さい)」

とて、*源少将、兵衛佐など、たてまつれたまへり。 *「げんせうしゃう、ひやうゑのすけ」は注にく夕霧の子息、蔵人少将の兄弟たち。源少将は四男(藤典侍腹)、兵衛佐は六男。蔵人少将は五男。>とある。蔵人少将の他に、もう一人この家には少将がいたらしい。私は知らなかったの、今までに蔵人少将を時々は源少将と呼称してきたが、以後は蔵人少将は蔵人少将と呼ぶしかないのだろうか。不便だ。

「情けはおはすかし(色々と行き違いもあったが、源殿はお気遣いは篤くいらっしゃることだ)」と、喜びきこえたまふ(と玉鬘殿は感謝申しなさいます)。

大納言殿よりも(藤原大納言殿からも)、人びとの御車たてまつれたまふ(女房用の牛車を差し向け下さいます)。北の方は(奥方は)、故大臣の御女(故右家殿の御息女の)、*真木柱の姫君なれば(真木柱の姫君なので)、いつかたにつけても(どちらからしても義理の親戚に当たり)、睦まじう聞こえ通ひたまふべけれど(親しく行き来し合いなさりそうなものだが)、さしもあらず(そうでもありません)。 *「真木柱の姫君」は客観的に個人が特定出来る分かり易い呼称だが、本文でこのように逸話に基づく語が人名語用されるのは非常に珍しい。

*藤中納言はしも(姫の異腹長兄の藤中納言は)、みづからおはして(自ら参列なさって)、中将、弁の君たち(実兄の左近中将と右中弁君たちと)、もろともに事行ひたまふ(一緒に新婦家家族として客人の応接をなさいます)。殿のおはせましかばと(故殿が御存命でいらっしゃったら太政大臣の威厳を以てさぞ立派な式を挙げられた事だろうと)、よろづにつけてあはれなり(何に付けても感慨深い)。 *「藤中納言」は二章一段に「藤中納言、故大殿の太郎、真木柱の一つ腹など参りたまへり」と本文に説明があった。故右家殿の長男で二歳下の同腹弟がいる。因みに、源侍従君を18歳と見た時の他の登場人物の年齢は、玉鬘51歳、藤大納言49歳、藤中納言38歳、真木柱41歳、源殿44歳、くらい。

[第五段 蔵人少将、大君と和歌を贈答]

蔵人の君(源蔵人少将は)、例の人にいみじき言葉を尽くして(いつもの取次役の中将の御許に極端な言葉を使って)、

「今は限りと思ひはべる命の(もうこれまでと思う命が)、さすがに悲しきを(さすがに悲しいので)。あはれと思ふ、とばかりだに、一言のたまはせば(あわれに思うとだけ一言仰って下されば)、それにかけてどめられて(それに引き留められて)、しばしもながらへやせむ(少しは生き延びれそうです)」

などあるを(などと書いてある手紙を)、持て参りて見れば(姫君の御部屋に持って参ってみると)、姫君二所うち語らひて(姫君は姉妹で話し合っ)、いといたう屈じたまへり(とてもひどく悲しんでいらっしやいました)。

夜昼もろともに慣らひたまひて(夜も昼も一緒に暮らし慣れていらして)、*中の戸ばかり隔てたる西東をだに(間仕切りの襖戸ひとつで隔てた母屋の西と東さえ)、いといぶせきものにしたまひて(とても邪魔に思いなさって)、かたみにわたり通ひおはするを(互いに自由に行き来していらっしやったのが)、よそよそにならむことを思すなりけり(姉の参院で別々に暮らすことになるのを寂しく思つての事なのでした)。 *「なかのと」は注に<『集成』は「中の戸」は、中仕切りの戸。障子(襖)であろう>と注す。>とある。

心ことにしたて(特別な花嫁衣裳で)、ひきつくろひたてまつりたまへる御さま(着飾りなさっていらっしやる姫君の御姿は)、いとをかし(実に素晴らしい)。殿の思しのたまひしさまなどを思し出でて(父殿が王家へ嫁入りするよにとの御考えを御遺言なさったことなどを思い出しなさって)、ものあはれなる折からにや(感傷気味だった時だったからか)、取りて見たまふ(姫君は蔵人君の手紙を手にとってお読みになります)。

「大臣、北の方の、さばかり立ち並びて(父上母上があのように立派に揃っていらして)、頼もしげなる御なかに(しっかりした御一家にあつて)、などかうすずろごとを思ひ言ふらむ(なぜ蔵人君はこうもいい加減なことを思い言うのでしょうか)」とあやしきにも(と変に思いながらも)、 「*限り(これで最後)」とあるを(と源蔵人の手紙の文面にあるのを)、 「*まことや(本当に最後にしたいものだ)」と思して(とお思いになつて)、やがてこの御文の端に(姫君はそのままその御手紙の端に)、 *「かぎりとあるを」は注に<蔵人少将の手紙に「今は限りと思ひはべる命」とあつたことをさす。>とある。 *「まことや」は、訳文では「や」を疑問の係助詞と取つて<本当だろうか>としてあるようだが、これは今の関西弁に良くある呼び掛けの間投助詞で、文意は<その通りだ、本当にそうしようじゃないか→絶対そうしたい>と源蔵人を突き放した言い方なんじゃないだろうか。下の歌にしても風情など皆無に見える。

「あはれてふ常ならぬ世の一言も、いかなる人にかくるものぞは (和歌 44-19)

「あはれが無常の言葉でも、誰に言ったら良いものか (意識 44-19)

*注に<大君の返歌。「あはれと思ふとばかりだに一言のたまはせば」とあつたことを受けて返す。>とある。大喜利問答風な歌詠みで、およそ情を排している。それでも恋は盲目だから、相手が如何詠むかは分からない。

ゆゆしき方にてなむ(死んだ人になら)、ほのかに思ひ知りたる(少しは心当たりがありますが)」

と書きたまひて(とお書きになって)、「*かう言ひやれかし(このように書いて返事しなさい)」「*とのたまふを(と仰るのを)、やがてたてまつれたるを(中将の御許がそのまま源蔵人に差し上げたのを)、限りなう珍しきにも(蔵人君は姫君自身からの御返事がこの上なく有難い上に)、*折思しとむるさへ(この参院当日の記念になさったとさえ考えて)、いとど涙もとどまらず(溢れる涙も止まりません)。「*かう言ひやれかし」は注にく『集成』は「こう言っておやり。書き換えて返事せよ、の意」。『完訳』は「清書して伝えよ、の気持か」と注す。>とある。 *「とのたまふを、やがてたてまつれたる」は注にく接続助詞「を」逆接の意。大君の言葉に反して、中将の御許は書き変えずそのまま蔵人少将に与えた。>とある。 *「をりおぼしとむる」は注にく『集成』は「院に御参りの当日、最後の折であることをお心に止めて返事を下さったのも(胸に迫って)」。『完訳』は「参院の当日、最後の機会と思って返事をくれたのも」と注す。>とある。「思ひとむ」は<思い出にする=記念にする>かも知れない。

立ちかへり(蔵人君は直ぐ返事を書いて)、「*誰が名は立たじ(「いかなる人にかくるものぞは」などと知らん顔をして、「誰が名は立たじ」と古歌にもあるように恋路に噂が立たないことはない)など、かことがましくて(などと素っ気ない姫の歌詠みを恋人気取りの恨みがましい口調で言っつて)、「*誰が名は立たじ」は注にく『源氏積』は「恋ひ死なば誰が名は立たじ世の中の常なきものと言ひはなすとも」(古今集恋二、六〇三、清原深養父)を踏まえたものであることを指摘。>とある。

「生ける世の死には心にまかせねば、聞かでやまむ君が一言 (和歌 44-20)

「無常をあはれと言うんなら、この世の恋は適わない (意識 44-20-1)

「生きて適わぬ恋ならば、あはれに死んでしまいたい (意識 44-20-2)

*「生ける世の死」は普通に読めば<寿命>で、「生ける世の死には心にまかせねば」は<寿命は自分で決められないので=寿命を座して待つのなら>だ。が、「誰が名は立たじ」の古歌を下敷きにして姫の句を読めば「死=無常=あはれ」と変数変換されて、「生ける世の死」は<生きていて姫にあはれと言っつて貰える事>の意味となり、「生ける世の死には心にまかせねば」は<生きてあはれと言われないなら=生きて適わぬ恋ならば>となる。「聞かでやまむ君が一言」は<君の歡心を買わずに人生は終わることになる=恋は諦める>と<君の歡心を買わずに思いを止めることは出来ない=恋に死す>との正反対の言い方を同時成立させている。どちらで読んでも悲恋だが、諦めて生きるのと死んで思いを遂げるのとで迷うというのは、例えば自爆テロに多く見られるように自分本位の、一時的な思い込みの激しさで問題の立て方を間違えた後ろ向きで破壊的で非生産的な発想で、持続生産的に現実問題の解決を図るなら、思いを遂げるために如何生きるか、自分が相手に何を提供できるか、を発想しなければならない。

塚の上にも掛けたまふべき御心のほど(墓の上にも優しい言葉を掛けて頂けるといふあなたのお気持が)、思ひたまへましかば(存じられますなら)、ひたみちにも急がればらましを(余念無く死に急ぐことも出来ますものを)」

などあるに(などと書いてあるので)、「うたてもいらへをしてけるかな(うかつに返事をしてしまったものだ)。書き変へでやりつらむよ(御許は書き直しせずにあのまま蔵人君に返したらしい)」と苦しげに思っつて(と苦々しくお思ひになって)、ものものたまはずなりぬ(もう蔵人君については何も仰らなくなりました)。

[第六段 冷泉院における大君と薫君]

大人、童、めやすき限りをととのへられたり(姫君の参院には女房も童女も美しい者ばかりが揃えられました)。おほかたの儀式などは(大体の婚礼儀式などは)、内裏に参りたまはましに(御所後宮に入内なさる時と)、変はることなし(変わるところはありません)。

まづ(新婦一行は先ず)、*女御の御方に渡りたまひて(身内縁者に当たる弘徽殿女御の御部屋にお入りなさって)、尚侍の君は(玉鬘殿は)、御物語など聞こえたまふ(女御とお話しなさいます)。夜更けてなむ(夜更けてから)、上にまう上りたまひける(院の御座所に参上なさいます)。*「女御の御方」は注に<冷泉院の弘徽殿の女御に玉鬘は挨拶する。弘徽殿の女御は玉鬘の異母姉、女一の宮の母女御として最も気をつかうところ。>とある。

后(後の秋好中宮や)、女御など(弘徽殿女御などは)、みな年ごろ経てねびたまへるに(みな長年の宮仕えで歳を取っていらっしやったので)、いとうつくしげにて(姫君がとても可愛らしく)、盛りに見所あるさまを見たてまつりたまふは(女盛りで見応えある花嫁姿をお見せ申し上げなさるの)、などてかはおろかならむ(何と立派なことか)。はなやかに時めきたまふ(華やかに院の御寵愛を受けなさいます)。「后、女御など」は注に<秋好中宮は五十三歳、弘徽殿女御は四十五歳など。>とある。本文の明示があるなら従うが、それぞれの年齢は此処までの本文での整合性で計算すると、姫君は19歳、玉鬘殿51歳、冷泉院47歳、秋好中宮56歳、弘徽殿女御48歳、というところかと思う。

ただ人だちて(冷泉院は普通の人らしくして)、心やすくもてなしたまへるさましもぞ(堅苦しくなく暮らしていらっしやるようなのが)、げに(却って)、あらまほしうめでたかりける(申し分なく尊かったのです)。

尚侍の君を(院は玉鬘殿を)、しばしさぶらひたまひなむと(姫君の付き添いで暫く院に留まるだろうと)、御心とどめて思しけるに(期待していらっしやったが)、いと疾く(とても早くに)、やをら出でたまひにければ(静かにお帰りなさってしまったので)、口惜しう心憂しと思したり(残念でつまらなくお思いなのでした)。

源侍従の君をば(冷泉院は源侍従君を)、明け暮れ御前に召しまつはしつつ(明けに暮れに御座所に呼んで近くに寄せなさり)、げに(実に)、ただ昔の光る源氏の生ひ出でたまひしに劣らぬ人の御おぼえなり(まるで昔の光る源氏が桐壺帝の御所でお育ちなさったのとそっくりな御寵愛振りです)。

院のうちには(源侍従は院内では)、いづれの御方にも疎からず(どの御方様の御部屋にも疎遠ではなく)、馴れ交じらひありきたまふ(慣れ親しんで出入りしていらっしやいます)。この御方にも(この姫嫁のお部屋にも)、心寄せあり顔にもてなして(気遣いを見せた風な物腰で顔を出して)、下には(内心では)、いかに見たまふらむの心さへ添ひたまへり(姫が自分に興味を持っていらっしやるのかを知りたかったのです)。

夕暮のしめやかなるに(夕暮れがしっとり風情ある日に)、藤侍従と連れてありくに(源侍従は藤侍従と連れ立って院内の庭を散歩していた時に)、かの御方の御前近く見やらるる五葉に(姫

嫁の御部屋の前庭近くにあると思われる五葉の松に)、藤のいとおもしろく咲きかかりたるを(藤の蔓が味わい深く咲き掛かっているのを)、水のほとりの石に(遣水のほとりの石に)、苔を蓆にて眺めみたまへり(苔をムシロ代わりにして座って眺めていらっしやいました)。

まほにはあらねど(冗談めかして)、世の中恨めしげにかすめつつ語らふ(源侍従は姫への失恋を恨めしげに覗かせながら話します)。

「手にかくるものにしあらば藤の花、松よりまさる色を見ましや」(和歌 44-21)

「私が藤を咲かせたら、松以上には色付かない」(意識 44-21)

*注に<薫の詠歌。『集成』は「私の力の及ぶものなら、姫君を人のものにはしなかったのに、の含意」と注す。大君を藤の花に喩える。>とある。「待つ」には<相手の反応や態度がわかるまで静観する。(大辞泉)>という意味もあるので、「松」は此処で松と藤を眺めている源侍従自身を示しているのだろう。と、此処までは察しが付いたが、さて、となると「松よりまさる」が<こうして待っていないで、もっと良く>という意味にはならず<自分以上の>ということになって、「色を見ましや」が<色が見えたものを>という意味にならず<こういう良い色を見せなかった>という自己否定になって歌意が取れなくなってしまった。困ったのでウェブ検索すると、お茶の水女子大学サーバ所蔵の『源氏物語』竹河巻「手にかくる」歌と「むらさきの」歌について」という原山絵美子という人の研究論文に、この歌は「手にかくるものにしあらば」が<手が届くものであったなら>ではなく<手を掛けて育てたものであったなら>の意であって、「松よりまさる色」は現に冷泉院に抛って実現されている<素晴らしい姫の姿>なのであり、「見ましや」が<自分では実現できなかった>という謙遜した言い方の「自嘲的に詠んだ」もの、との説明があった。確かにそういう歌筋なら文法にも適っていそうに見えるし、手が届くなら待っていないなどという自明の筋を藤と松に掛けて言い回した歌詠みと見るよりは、上品な味わいもある気がするし、「手が届く」よりは「手を掛ける」という言いの方が「恨めし氣」がイヤラシク滲む。救われた気分で従いたい。更に言えば、「花の色」は特に歌に於いては性反応を思わせる語で、「色を見ましや」は露骨な言い方に聞こえるが、局部アップのえげつなさという点に於いては今日の写真映像技法の方が圧倒的に勝っているにも関わらず、こういう表現にえげつなさを感じるのは恐らく、そこに人間関係に於ける価値観の移動という愛欲の本質が示されているからなのだろう。

とて(と詠んで源侍従が)、花を見上げたるけしきなど(藤の花を見上げた姿などが)、あやしくあはれに心苦しく思ほゆれば(妙に印象深く同情できたので)、*わが心にあらぬ世のありさまにほめかす(藤侍従も姉姫の参院を賛成していなかったと打ち明けます)。*「わが心にあらぬ世のありさま」は<自分は不同意だった姉姫の参院>で、二章四段に「侍従の君も若き心地に、近きゆかりにて明け暮れ睦びまほしう思ひけり」と藤侍従は源侍従が姉姫の婿になる事を望んでいた事が語られていた。

「紫の色はかよへど藤の花、心にえこそかからざりけれ」(和歌 44-22)

「紫ながら藤の花、意に満たぬかと案じられ」(意識 44-22)

*注に<藤侍従の返歌。「色は通へど」は大君と姉弟であることをいう。「藤に花」「かかる」は縁語。>とある。また、この歌の渋谷訳文は「紫の色は同じだが、あの藤の花はわたしの思う通りにできなかったのです」とある。前出の原山論文には、この歌については源侍従の歌ほどには分かり易い説明に思えず、私なりの受け止め方になるかとは思いますが、「心にえこそかからざりけれ」を<思う通りにできなかった>と言い換えるのは言い過ぎで<満足には

関われなかった>くらいの意としてあるようだ。「掛く」や「掛かる」は<関わる>や<関わっている>という広く関係性を示す語で、その具体的な中身となると非常に多くの形態や意味を持ち得るので、その語用も曖昧にも含み多くにも、また象徴的にも限定的にも示されて、元々多様な解釈を許すし、それを狙って使用されたりもするのだろうから、この歌は大意として、藤侍従が源侍従に幾分かの釈明を意図した、とは読めるのだろう。だから、力不足を詫びた、という筋で言い換える分には少々表現に元歌から離れるところがあっても、むしろ言い回し優先で良いような気がする。が、それよりも私がこの歌を一読した時の直感、というか第一印象は、「紫の色はかよへど藤の花」は<藤侍従が姫君の弟という血縁>であることよりも、藤の花は紫色だが<藤原姫は王家血筋の源氏家とは違う>という意味に見えて驚いた。というのも、この物語に於いて「むらさきの」と言えば、それも特に歌で言えば、「紫のゆかり」である若紫君や、その王家血筋を求めた光君、が当然に思い浮かばれ、当歌に於いても「色は通へど」で血縁関係を示すという言い回しは、古今集 867 番読人知らずの「紫の一本ゆえに武蔵野の草は皆がらあはれとぞ見る」に基づく、とは他注に示されているようで、であれば、「心にえこそかからざりけれ」は<藤侍従の力不足>ではなく<源氏家の意に満たないだろう＝源侍従に不相応>という意味での釈明になろうかと思う。とは言え、それは読者の視点であり、藤侍従が源侍従に<藤原姫では源氏家に劣る>などと謙遜する理由は無いし、現に姫は六条院より更に格上の冷泉院に参院しているのだから、是は場面上は成立しない歌意ではある。それでも、作者に読者にその意を暗示させる意図が無かったのか、と言え、私にはその作意があったように思えてならない。何しろ、源侍従は六条院の末子だが、実は藤侍従の従兄弟であり、源氏家を継ぎながらも藤原血筋という人物なのだから、此处で源氏家を強調すれば、その逆説構造の面白さが生きてくるという仕掛けだ。

まめなる君にて(藤侍従は誠実な人なので)、いとほしと思へり(源侍従を気の毒に思います)。いと心惑ふばかりは思ひ焦られざりしかど(源侍従はひどく思い悩むほどは姫への失恋に動揺はしていなかったが)、口惜しうはおぼえけり(残念には思っていました)。

[第七段 失意の蔵人少将と大君のその後]

かの少将の君はしも(かの源蔵人君は)、まめやかに(一途に)、いかにせましと(どうしたものかと)、過ちもしつべく(間違いも起こしそうなほど)、しづめがたくなむおぼえける(藤姫への失恋を鎮めようもなく思い詰めていました)。

聞こえたまひし人びと(姫君に求婚なさっていた貴公子たちは)、中の君をと(妹姫との縁談に)、移ろふもあり(乗り換える者もありました)。

少将の君をば(玉鬘殿は蔵人君を)、母北の方の御恨みにより(その母上の三条殿の御不満をかわす為にも)、さもやと思ほして(次女の婿にとお考えになり)、ほのめかし聞こえたまひしを(少しお勧め申しなさったが)、絶えて訪れずなりにたり(蔵人君は玉鬘邸に絶えて訪れなくなりました)。

院には(冷泉院には)、かの君たちも(玉鬘殿の子息たちも)、親しくもとよりさぶらひたまへど(六条院の孫君たちなので、親しく以前から伺候なさっていたが)、この参りたまひてのち(姫君が参院なさってからは)、をさをさ参らず(滅多に寄り付き申さず)、まれまれ殿上の方にさしのぞきても(ごく稀に公用で院の御座所に顔を見せても)、あぢきなう(余所余所しく)、逃げてなむまかでける(逃げるように帰るのです)。

内裏には(帝におかれては)、故大臣の心ざしおきたまへるさまことなりしを(故太政大臣が姫君の入内を目指していらした様子が顕著だったので)、かく引き違へたる御宮仕へを(このように話の違う冷泉院への参院を)、いかなるにか(どういう次第なのか)、と思して(とお思いになって)、中将を召してなむのたまはせける(実兄の左近中将を呼び付けて質しなさいました)。

「御けしきよろしからず(帝のご機嫌が悪いのです)。さればこそ(こうなると解っていたから)、世人の心のうちも(姫の参院は誰が見ても)、傾きぬべきことなりと(首を傾けることだと)、かねて申しし事を(私が予てから申ししていた事を)、思しとるかた異にて(母上はお考えが違って)、かう申し立ちにしかば(このようにお決めなされたので)、ともかくも聞こえがたくてはべるに(何とも申し上げ難いのですが)、かかる仰せ言のはべれば(現にこうした帝の仰せ言がございましては)、なにがしらが身のためも(私どもの立場も)、あぢきなくなむはべる(拙いことに成っております)」

と(と中将は)、いどものしと思ひて(とても不満に思っ、尚侍の君を申したまふ(玉鬘殿を責めなさいます)。

「いさや(いえ何も)。ただ今、かう(直ぐにこうと)、にはかにしも思ひ立たざりしを(簡単に決めたものではないのに)。あながちに(冷泉院が熱心に)、いとほしうのたまはせしかば(姫の参院をお望みと仰ったものだから)、後見なき交じらひの内裏わたりは(父上と死に別れた姫の後ろ盾のない後宮仕えは)、はしたなげなめるを(情けない目に遭いそうだが)、今は心やすき御ありさまなめるに(院は今では実権から離れて穏やかに暮らしのようなので)、まかせきこえて(姫をお任せ申そうと)、と思ひ寄りしなり(と思ひ至ったのです)。

誰れも誰れも(誰一人と)、便なからむ事は(良くない事なら)、*ありのままにも諫めたまはで(その時に注意なさらずに)、今ひき返し(今更に)、右の大臣も(源殿も)、ひがひがしきやうに(不満足実な)、おもむけてのたまふなれば(顔をして仰るので)、苦しうなむ(困ります)。これもさるべきにこそは(これも姫の宿命かと)」 *「ありのままにも諫めたまはで」は注に<『完訳』は「実際には中将たちが参院に反対した。これは当座の言いのがれ」と注す。>とある。「言いのがれ」と言うよりは<開き直り>に見える。二章六段で中将らは「春宮はいかが」と薦めていた。

と(と玉鬘殿は)、なだらかにのたまひて(穏やかに仰って)、心も騒がいたまはず(心も動じなさいません)。

「その昔の御宿世は(そんな前世の宿縁は)、目に見えぬものなれば(目に見えないものなので)、かう思しのたまはするを(帝がこうして御不満を仰るのを)、これは契り異なるとも(今回は縁が無かったと)、いかがは奏し直すべきことならむ(どう奏上したら御機嫌が直せるんですか)。

中宮を憚りきこえたまふとて(今後の中宮に六条院女だからといってご遠慮申し上げるとしたら)、院の女御をば(藤原女である冷泉院の女御は)、いかがしたてまつりたまはむとする(如何お考え申し上げなされるのですか)。後見や何やと(女御は姫の後見をなさる御心算とか何とか)、かねて申し交はすとも(予ねてお話し合いなさっていても)、さしもえはべらじ(妃同士で、そう和やかにも行きますまい)。よし(まあ)、見聞きはべらむ(先行きを見てみましょう)。

よう思へば(考えてみれば)、内裏は(うちは、御所には)、中宮おはしますとて(今後の中宮がいらっしゃるからといって)、異人は交じらひたまはずや(他に妃はいらっしゃらないのでしょうか)。君に仕うまつることは(宮仕え申し上げるのは)、それが*心やすきこそ(それが苦で無いから)、昔より興あることにはしけれ(昔から楽しいものというのでしょうか)。 *「心安し」は<安心だ、気楽だ>という語用が多いのだろうが、此处では、中宮に対して他の妃も萎縮していない、という内容を形容しているのだから、然程は<苦じゃ無い>ような言い方なんだろう。

女御は(冷泉院のほうが気楽だと言っても、女御にあっては)、いささかなることの違ひ目ありて(ちょっとした行き違いがあつて)、よろしからず思ひきこえたまはむに(姫を悪く思い申しなさることがあれば)、ひがみたるやうになむ(間違つた縁組のように)、世の聞き耳もはべらむ(世間は聞き耳を立てましょう)」

など、二所して申したまへば(などと中将と中弁の兄弟二人して責めなされば)、尚侍の君、いと苦しと思して(玉鬘殿はとても辛くお思いになったが)、さるは(しかしながら)、限りなき御思ひのみ(院は姫にこの上ないご寵愛ばかりが)、月日に添へてまさる(日を追うごとに深まります)。

七月よりはらみたまひにけり(姫君は七月から御懐妊なさいました)。うち悩みたまへるさま(体調変化で苦しんでいらっしゃる姿は)、げに(実に妖艶で)、人のさまさまに聞こえわづらはすも(男たちがさまさまに求婚して騒ぎ立てたのも)、ことわりぞかし(無理も無い)。いかでかはかからむ人を(どうしてこれほどの女を)、なのめに見聞き過ぐしてはやまむとぞおぼゆる(漫然と見過ごしていられようかというところです)。

明け暮れ(院は盛んに)、御遊びをせさせたまひつつ(姫を慰めるべく、管弦の演奏をさせ為さつては)、侍従も気近う召し入るれば(源侍従も院が近しく御部屋に呼び入れなさるので)、*御琴の音などは聞きたまふ(姫の弾きなさる御琴の音などは聞き耳を立ててお聞きになります)。 *「おおんことのね」は注に<大君が弾く琴の音。>とある。「音などは」の「は」強調の係助詞なので<聞き耳を立てて>を補語する。

*かの「梅が枝」に合はせたりし中将の御許の和琴も(あの一月の玉鬘邸訪問で源侍従が歌った催馬楽の梅が枝に合わせていた中将の御許の和琴も)、常に召し出でて弾かせたまへば(院はいつも呼び出して弾かせなさつていらっしゃつたので)、聞き合はするにも(その音からあの日の光景を思い合わせて)、ただにはおぼえざりけり(侍従君は感慨深いのでした)。 *「かの梅が枝」とは、一月二十日過ぎに源侍従が玉鬘邸を訪れた際の「西の渡殿の前なる紅梅の木のもとに「梅が枝」をうそぶきて立ち寄るけはひ」と語られた二章三段にあった場面のことらしく、その侍従の歌に合わせた女の琴も上手だった、とも語られていたが、それが「中将の御許の和琴」だったとは此处で初めて明かされる。また、注には「中将の御許」について<大君の女房として一緒に冷泉院に入っている。>とある。確かに、二章三段での思わせぶりの書き方は少し気になったが、此处で明かされても、そも「中将の御許」の人となり立体的に語られていないので、読者の少なくとも私の印象は何も膨らまない。